

三十八、嚴護法城

大無量壽經に言わく、

嚴護法城 開闡法門 洗濯垢汚 顯明清白 光融仏法 宣流正化

「嚴護法城」というのは、無量壽經にある言葉で、大經の會座に一時に來會した淨土の菩薩の普賢の徳を示された文字の一句である。そして宗門によつて、一派策勵のためにしばしば使用せられる文字である。

菩薩は法城を護る。法城を護るとはいかなることであらうか。

法城とは、淨影は「人の毀謗を遮するなり。法能く遮防する、之を説きて城と爲す。」と釈した。什公は「法城とは、実相の妙法なり。」と言つた。

以上によれば、法とは、世尊の悟りたもうた大法のことである。菩提樹下所得の微妙法のことである。しかし別して言えば、六字の大法のことである。城と言つたのは、先に戦に喩えられたがゆえに今は城と言われたのである。

先には「法鼓を吹き、法螺を吹き、法劍を執り、法幢を建て。」と説かれたが、その中、法幢を建てと言われた言を「法城を嚴護し、法門を開闡し」と釈せられたのである。

嘉祥、淨影、憬興などの先哲の註疏を総合すると、

「扣法鼓」とは「兵を誡むるの義」と言い、「遠く聞ゆるの義」ということである。教えは、必ず陣中鼓を打つて、兵を誡めるがごとく、人を誡める。教えは人を誡める。

「吹法螺」とは「令を改むるの義」といい、「貝を吹いて時を知らしむ」という。大法の菩薩における、兵士に対する命令のごとく、止まれと言ひ、進めと言ひ、すべて命のごとく行動するのである。大法はご通知にあらず、ご案内にあらず、ご機嫌取りにあらず、お話にあらず、わが内心に仏智を廻向しつつ、その全我を動かしたもう必然の大道であり、無上の命令である。

「執法劍」とは「斬斫の義」であり「破裂の義」と釈せられる。刀劍を執つて悪徒を斬るがごとく、如来の説法は外道の強敵を対治し、その邪執を摧滅することである。名号大法の利劍のみ、よく衆生の邪見を砕いて、よく無我の人たらしめたもうのである。

「建法幢」とは「高出の義」であり「戦勝の義」である。敵の城に突入して戦勝せば、万歳の声とともに、日章旗を建てる。法幢を建てるとは、戦勝つて高く勝利の幢を建てることのごとく、外道の邪見を摧滅して、ついに正法を建てるの威徳を示されたのである。

かくして法城は護られるのである。されば、法城を嚴しく護るとは、まず正法の勝ちますことである。しこうして、戦勝つ時、城の門は開かれて、入出自在なるがごとく「法門は開闡せられ」て衆生はこの門に趣き入つて助かるのである。

「法城を厳しく護る」とは、かくのごとく、法門が明らかにせられ、大法が真に輝き生きたもうことである。真実に念仏に生きることである。それにおいてほかに法城はあり得ない。真に大法に生かされることをぬきにして、城を造ってそれを守ろうとすれば、法城ではなくて我慢の城である。

七百年の古、叡山南都も法城を厳護したし、吉水の念仏門もまた法城を護った。しかし叡山南都は外に権力を奮って、権勢によつて、比叡の法城を安泰にしようとしたし、吉水はただ草庵にあつて師の教えのままに、念仏によつて解脱への道を急いだ。叡山などは、いつも非難すべく、法城をおびやかすものを外に求めた。したがつて外への構えに力を入れた。しかし吉水はあくまで一枚起請文を内に向かつて書いた。一方は裁いた。一方は裁かれた。

法然門下の人が、院の御所の女官を剃髪出家せしめたという失態がもとで、ついに吉水の教団は解散されてしまった。形において法城は破れたのである。

しかし破れたはずの念仏門は破れてはいなかった。そして勝つたはずの叡山南都こそ破れていた。われらはここに、大経の「嚴護法城」なる文字の本当の意を知らされる。

如來の御冥見に慚愧し、御冥慮を頂き、御冥加を感謝して、念仏一つに生ききるべきである。

淨影は、この「嚴護法城」の文字の意味を、続いて出てくる大経の「顯明清白、光融佛法」の文字の上に見た。「清白を顯明し、佛法を光融す」とは、清白の法ということである。大法には一点の濁りなく、一切の邪を離れ、迷妄を出で、如來淨土の清淨真実そのままのものであるがゆえである。

罪惡、業苦の濁れに満ち、邪謗に固まつた凡夫外道が、救われて淨化せられるのは、大法が清白であるからである。されば「垢汚を洗濯し、清白を顯明す」と説かれる。

大法は清白である。何をしてもそれを汚すことはできない。しかし人間が、汚れた心によつて大法をはからえば、弄べば、垢だけが心の底に固定して、金剛の信心に似た邪見我慢のコンクリーのトーチカができる。

世には、同行に法門を聞かせば、同行が高慢になると考えている人がある。けつして法門を聞かして邪見憍慢になるのではない。法門は清白である。清白な法門によらねば、心の一切煩惱を転惡成徳することはできない。邪見になるのは、心の垢が固定化するがゆえである。

「清白を顯明す」、顯明とは「邪を除き正を顯す」ことである。菩薩の成就する世界がそこにある。邪な法を破り、正法を明らかにし顯すことである。この破邪顯正は、まず内に向かつてなされねばならない。

何が邪法であるのか、何が正法であるのか、それが顕明されないで、外に向かつて剣が向けられることは、恐るべきである。上求菩提のうちのみ下化衆生があり、自信の中におのずから教人信がある。自ら求むることをやめて、人の邪悪を破ることにのみかかわり果てることは、道を求むる者の大きなつまづきである。深く求めて自ら清白の法に生きるものは、その念々の歩み、おのずから破邪顕正を成就するのである。かく、身をもつて「清白を顕明す」る者のみ、よく法城を護るのである。

「清白を顕明し、仏法を光融す。」

光融とは、光とは光揚で「あらわしあげる」ことである。仏法をはつきりと光すこと、輝かすことである。融という字は、とかすこと「融治して浄なら使む」とて、仏法は円融無碍の世界である。真実の大宝海は、円満なる功德そのものである。聖人が「満足、大悲、円融、無碍の信心海」と言われたがごとく、本願の名号の世界は、円融である。

大法は円融なるがゆえに、それ自身、八万四千の善法の融けたものであり、やがて衆生の上に融けるものであり、衆生を融かすものである。罪悪煩惱が円融なる大法に融かされればこそ、そこに救いを成就するのである。「融治して浄ならしむる」のである。

大法は衆生の機に融け、機を融かし、邪見を融かせばこそ、正法は衆生の世界に事実となるのである。衆生の上に、事実となればこそ、輝きあらはれるのである。であるがゆえに「光融御法」と言われるのである。重ねて言う。正法は、衆生の邪見をとかし、悪業を浄化しつつ高く明らかに輝くのである。あらわれるのである。これすなわち、顕明清白によって現われる世界である。

次には「宣流正化」——正化を宣流す——とある。清白の法が流れる世界、正教の聞説せられる世界では、必ず「垢汚が洗濯せられ」て、真正の化益が成就する。

「正覚の大音は十方に響流す」大法が宣べられる時、大法は必ず横にも豎にも流れてゆく。そして宣流されて人を化してゆく。

かくて「嚴護法城」とは、まことに真に正法の生きてくださることである。清白の大法に濁りを入れず、顕明なる大法に融かされて仏法を光闡することである。厳しく人間の権力を固めたり、術策を廻らしたり、金力にたよったり、殿堂の廣大にたよったりすることではない。

蓮如上人の「一宗之繁昌と申すは、人の多く集り威の大きいなる事にてはなく候。一人なりとも人の信を取るが一宗の繁昌に候。然れば、専修正行の繁昌は、遺弟の念力より成ず。」(『御一代聞書』)の御訓は、真に頂戴すべきである。

われらは、純粹に真実に大法を頂かなくてはならない。

沈黙して、如来久遠の真実そのままの大法に渴仰の耳を傾けなくてはならない。

社会からさまざまな雑音が聞こえる。しかし正法のみ真実である。そうして正法のみ法城となりたもう。

法城のみ、一切に滅びない。

法城のみ、一切衆生の涅槃に通入する門となりたもう。

正法を聞持して動かぬ者のみ、六字の城に召されたものである。

正法は必ず、内に大信を充満して下さる。内に充ちた者だけが、真の力を發揮する。内に信の力が満ちていないものは、外の力に動かされ滅ぼされる。

法城にのみ、戦勝の法幢が建てられ、不滅の歡びがある。

人も、家も、日本国土も、尊い法城となれ。法城にのみ、光と、浄化と、力と、安らぎがある。

(一一一、一〇、一五、極樂寺にて)